

# 第7回 長崎地域医療 セミナー in GOTO 報告



交流会では五島市のご厚意で五島牛のバーベキューも! 美味しいものを前にすると、ハードなカリキュラムも何のその。

今回のワークショップは、二校の学生による学生実行委員会を中心として組み立てました。初顔合わせの学生たちのグループワークがスムーズにいくよう、パズルゲームを取り入れるなど工夫もされています。中でも秀逸だったのが、模擬症例として島で暮らす架空の三人の患者のケースを提示し、患者の要望や課題、短期・長期の具体的な支援策をグループごとに

まとめる、というものでした。最初はなかなか会話が弾まないものの、自身の専門分野の知識やフィールドワークで得た知見を生かしながら、議論がだんだんと活性化。島の人々の暮らしを「自分ごと」として考えながら練り上げていきました。

長崎大学の離島実習は常に、五島中央病院の中にある「離島・へき地医療学講座離島医療研究所」のスタッフが中心となって運営されています。学生の実習だけでなく、他大学と共同の疫学研究なども行っており、十年以上にわたり築かれた信頼関係と地元の方々の協力があったからこそ、このようなセミナーの開催が可能なのです。ちなみに五島市では、人口減少の課題に対して若い世代のUターン、Iターン定住の取り組みも行っており、昨年は県下で二位の二〇二名という実績をあげています。来年度は日本語専門学校を開校し、留学生を一〇〇名以上呼び込むのだそうです。

長崎大学では、今後も離島の持つポテンシャルを生かしつつ、積極的に実習プログラムを組んでいきます。

## 島の問題を「自分ごと」に

## 学生主体のワークショップで

「ヘルスケアという大きな輪の中で、医療、保健、介護、福祉の連携が叫ばれています。しかし離島地区では、その課題について以前から取り組んできました。学生の皆さんには、フィールドワークやワークショップを通じて、医療系が持つ診断や治療といった医療モデルと、福祉系が持つ生活を支えるサービスや補助といった生活モデル、これら二つを合わせた合同モデルの提供を考えていただきたいですね。『多職種連携』を言葉だけではなく現場の課題の中で学

ぶ良い機会です」。今回参加した学生は、二校合わせて四十八名。八本の講義と6セクションのワークショップ、フィールドワークと、内容はぎっしり詰まっています。もちろん、夏の五島を楽しむ野外交流会や海水浴などのアクティビティも盛り込まれていました。フィールドワークでは、地域中核病院、二次離島の診療所や介護施設など、九つの受け入れ施設に向きました。その一つ、特別養護老人ホーム只狩荘の山田峰雄施設長にもお話を伺いました。

長崎大学の特徴の一つに、医・歯・薬学部などで行われる離島実習が挙げられます。

島の数が日本一多い長崎県の地の利を生かし、本土より早く少子高齢化が進む離島で実習することで、将来役立つ実践力を身に付けようというものです。

さまざまなカリキュラムの中で最大規模のセミナーが、この夏開かれました。



## 注目の離島実習における医療と福祉の合同モデル

毎年八月に行われる「長崎地域医療セミナー in GOTO」。長崎大学医学部医学科の学生と長崎純心大学人文学部地域包括支援学科の学生を対象とする共同プログラムです。七回目の今回は、八月二十五日～二十七日の三日間、五島市の全面協力の下で開催されました。ずっと携わってこられた長崎大学前田隆浩教授（生命医科学域）のお話です。

「当施設は、県内でも初めて『日中おむつゼロ特養』として認定されました。水分摂取や食事、排泄、運動などを理論的に管理して、利用者の自立支援を促します。そうすることで職員も達成感を得られ、モチベーションも上がります。特養介護施設は、介護士、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカー、歯科衛生士、管理栄養士など、十種以上の専門職が働く多職種連携の現場で、情報をデジタル化して共有するなどして

ワークショップ



2校混合のグループで模擬症例に取り組みました。時折、講師の先生方からヒントをもらい、離島の暮らしの背景を聞きながら、医療と福祉、両面から課題解決の道を探ります。

フィールドワーク



只狩荘では最新の入浴助機器も見学。「今、IoTの技術は介護現場にどんどん導入されており、デジタルに対応できる職員も求められています」と施設長(下写真・左)。

オープニングと講義



富江町公民館を3日間借り切ったのセミナーは前田先生(右)の挨拶で始まりました。「10年後のあなたはどんな医療を学べばいいか」と語る佐野潔先生(左上)や対馬で産婦人科医として働く山内祐樹医師(左下)など、最前線で活躍する講師陣の刺激的な講義が続きました。